

鮎川哲也と十三の謎

# 生ける屍の死

DEATH OF THE LIVING DEAD  
Masaya Yamaguchi

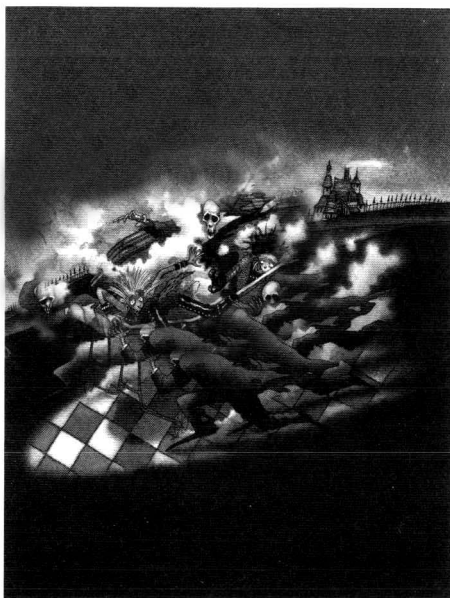
山口雅也



# 生ける屍の死

DEATH OF THE LIVING DEAD

山口雅也



著者紹介

一九五四年横須賀市生まれ。早稲田大学法学部卒業。ミステリをはじめ、ロック、ジャズなどの評論、エッセイを手掛け、ミステリ・マガジン、スイングジャーナル、月刊プレイボーイ、読売新聞などで健筆をふるう。主著にゲームブック・スタイルのミステリ『13人目の名探偵』があり、ほかに「ハードボイルド」というLPレコードのプロデュースを行なうなど、幅広い活動をつづけている。

生ける屍しかばねの死し

一九八九年十月二十日 初版

著者——山口雅也  
やまぐちまさや

© Masaya Yamaguchi 1989, Printed in Japan



発行者——平松一郎

発行所——株式会社東京創元社

東京都新宿区新小川町一—五 郵便番号一六二

電話 東京 (〇三) 二六八—八三二(代)

振替 東京六—一五六五

印刷——暁印刷 製本——鈴木製本

乱丁・落丁本はご面倒ですが小社までご送付ください。  
送料小社負担にてお取替えいたします。

## 序

昭和三十年、というからすでに三十年余も前のことになる。講談社から「書下し長篇探偵小説全集」全十三巻が刊行された。その内の十二巻は既成作家に、残りの最終巻は新人の応募入選作に当てられることになった。私は『黒いトランク』をもって応募し、江戸川乱歩先生の強い御推輓もあって入選を果たしたのである。刊行に際し現在の筆名を使用したもので、これが事実上、私のデビューといってもいいだろう。さきほども申しした通り、それから三十年以上の年月がたつけれども、その時の天にも昇る如き心境は、まるで昨日のことのように鮮明に記憶している。

ところで、この度、長く海外推理小説の紹介をつづけている東京創元社が、日本人作家による書下しシリーズの企画を携えて、私の許を訪ねてこられた。斯界にとって未曾有といつてよい大出版ブームにあつて、「推理小説」の内容は一層拡散し、ともすると本来の持ち味や感動を見失いがちな昨今の状況である。ここでもう一度、原点に立ち還つて、私たちが『本陣殺人事件』や『不連続殺人事件』などの名作に接した頃の新鮮な感動を呼び起こすような、創意と情熱に溢れる鮮烈な新作を揃えて読者に提供したい、という編集者の熱意がこちらにも乗り移つて、いつの間にか、あの人に書いてもらったらどうでしょう、この人はどうか、といった話はずみ、知

らず知らずのうちにこの企画の音頭取りに祭り上げられてしまっていたのである。あとで冷静になつてから考えると、これは大変なことを引き受けてしまったものだ、と後悔したが、それこそ後の祭であつた。

だが、その企画立案中は、私にとつてまさに至福の一時であつた。予定ではハードカバーで刊行したいそうで、すぐれた書下し長篇が書架にずらり並んだところを想像すると、それだけで胸がはずんでくるのだ。そしてその時、私の脳裏には三十数年前の感慨が甦つていたのである。東京創元社の意向では、かなり大胆に新人を登用したいということであつた。概ねの案に賛同した私は、それなら是非、最後に一卷を追加する、これは公募形式にして、その入選作に当ててほしい、と提言した。

こうして協議を進めるうちに、期せずして私のデビュー時と同じ、全十三巻のプランが形作られていったのである。監修者というのは気恥ずかしいが、三十年前に十三番目の椅子に坐つた者として、縁が無いわけでもなからう。優秀な新人のデビューに微力ながらお手伝いができるとしたら、私として望外の幸せというものである。

鮎川 哲也

目次

序 鮎川哲也

納得のいかないプロローグ 9

第一部 死せる生者たち 13

1 ピンクの霊柩車 14

2 死の陰の谷を歩みし者の帰還 23

3 墓の町の葬儀屋一族 30

4 スマイル霊園の微笑 39

5 一族の集い 48

6 霊園改造計画 56

7 棺桶暴走列車 66

8 お茶と強情 76

9 主人公が死んだら物語はどうなるんだ？ 90

10 四つ辻カフェと愚者の毒 99

11 それぞれの秋、もの想う秋 110

12 飼いなされた死 120

13 「ジョン・バーレイコーンは死ななきゃならぬ」

14 楽しいエンババミング 139

15 《<sup>ゴールドデン・スランパリス</sup>黄金の眠りの間》にて 146

16 最後の晩餐 154

	17	スポーツと気晴らしと探偵と	163
	18	「ジョン・バリーライコーンは甦らにやならぬ」	
		第二部 生ける死者たち	183
	19	深夜の霊柩車レース	184
	20	ヴィデオの罠	195
	21	デッド・オア・アライヴ	204
	22	消えたファリントン氏	214
	23	警部、墓穴を掘る	223
	24	死の威嚇	232
	25	チェンシャの冒険	245
	26	屋根裏部屋の過去	257
	27	柩とり違え事件	270
	28	墓を暴いてはいけません	283
	29	トレイシー警部の小団円	295
	30	死者は語る	308
	31	グリーンは語る	320
	32	生ける屍の死	338
		エピソード／霊柩車はどこへ	351
解説		鮎川哲也	357

装画 装幀  
 ひらいたかこ  
 矢島高光

生ける屍しかばねの死

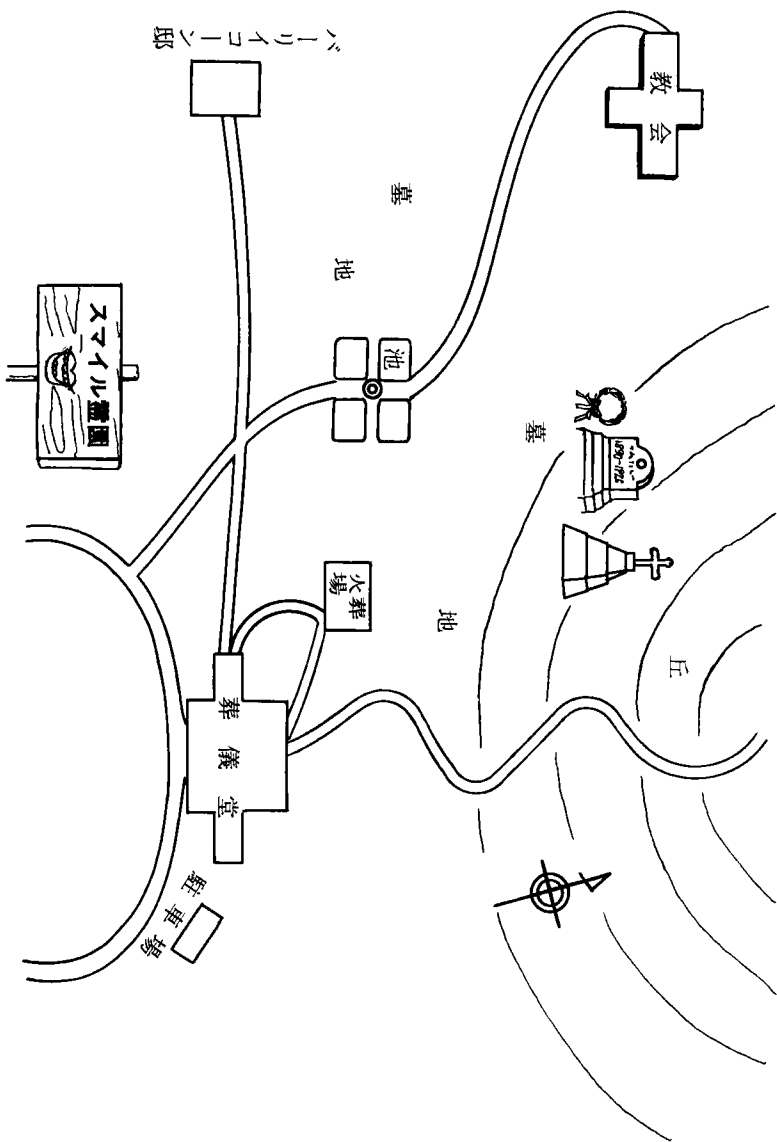
K・Yに感謝をこめて



## 登場人物

スマイリー・バーリイコーン	スマイル霊園支配人
モニカ	スマイリーの妻
ジョン	スマイリーの息子
ウィリアム	//
ヘレン	その妻
ジェームズ	スマイリーの息子
ジェイソン	//
フランシス (グリーン)	スマイリーの孫
カーラ・オブライエン	スマイリーの娘
フレデリック	その夫
フランク・オブライエン	トゥームズヴィルの不動産屋
ヴィンセント・ハース	スマイル霊園顧問、死学博士
イザベラ・シムカス	ジョンの愛人
サーガ (チェシャ)	その娘
アンドリュウ・ハーディング	弁護士
マリアーノ神父	霊園カトリック教会司祭
南賀平次	土地開発業者・葬儀評論家
ウォーターズ	} .....スマイル霊園職員
エッティング	
ボンシア	
クルーズ	
ノーマン	墓掘り人
マーサ	バーリイコーン家料理人
ビル	《カフェ・クロスローズ》店主
ガス	トゥームズヴィルのチンピラ
ジム・フィルダー	PR業者
ヒューバート・ファリントン	テキサスの富豪
ピーター・ルイス	その秘書
パトリック・ハント	演劇雑誌コラムニスト
スチュワート・コリンズ	臨床心理医
リチャード・トレイシー	マーブルタウン署警部
チャーリー・フォックス	} ..... 同 刑事
キャラハン	
ロベス	





## 納得のいかないプロローグ

「あなたが犯人ですね、アンヘラさん」

ネヴィル警部は、いたるところに血が飛び散った部屋の中を見渡しながら、いかにも気がなさそうに言った。部屋の隅につつま立った肥った女は、汗まみれの額にはりついた髪のかきあげながら、スペイン語交じりの片言英語で猛烈な抗議を始めた。警部はいささかうんざりした顔でそれを聞きながすと、油じみた床に転がっている死体を指さして、ふたたび言った。

「おまえが旦那のカボチャ頭をかち割ったということぐらい、こちらはとっくにお見とおしなんだ！」

警部の口調には、もはや鄭重ていじゆうさも気のなさそうなそぶりもなかった。——この女にはお上品ぶった仮面など必要ない。頭ごなしにやっつけてやるに限る。警部は心の中で密かに舌打ちをした。彼の目の前でわめいている女は、受け持ち区域に最近流れこんできた中米移民のなか

でも、とくに性悪のひとりだった。こいつが犯人でなかったら、死体が起きあがって裸足で逃げ出すだろう。そう、賭けたっていい。

「いいか、おまえの小賢こごましいトリックをおれが説明してやろうか？ あの窓際の水槽のなかにつけられた砂時計、あれとケチャップを塗りたくられたビエロの人形のふたつがあったおかげで、おまえのアリバイが成立した。しかしな、おれは暖炉の隅に捨てられていた萎しぼれたサポテンの存在を見逃さなかった。あれこそ、おまえのアリバイを破り、おまえが殺人を犯したことを物語る重要な証拠……」

警部はまくしたてながら自分に酔いはじめていた。今回はこのほか早くかたづいた。夫殺しの犯人は妻、妻殺しの犯人は夫と、だいたい相場が決まっているもんだ。だが、こんどの事件はタチが悪かった。おれのように鋭い推理力をもった捜査官でなければ、とても解決できなかったらう。

警部がいささか得意げな顔つきで事件の真相を語り終えようとしたとき、部屋の戸口にロビンソン部長刑事が現われた。

「警部、やっばりありましたよ。寝室のクローゼットのなかにつつこんでありました」

そう言いながら部長刑事が差し出したものは、小ぶりだが切れ味のよさそうな斧だった。刃の部分には、もちろん黒褐色に変色した血がこびりついている。

警部は満足そうにうなずくと、背後に転がっている死体をちらりと見やった。憐れな男の白髪頭はあの斧でやられたのか。夫婦の間にどんな争いがあったか知らんが、ああなつてしまつては、もうチキンの焼きぐあいひとつにも文句をつけることはできないだろう。

死体の唇が文句を言いたそうにピクリと動いた。

警部は驚いて目を瞬瞬と、もう一度死体を凝視した。いま、死体の唇が動いたような気がしたが……、あれはおれの見まちが이었다のか。検屍医はたしか、被害者は一、二時間前に死亡したはずと断言していったではないか。被害者は斧で頭をたたき割られて即死。これはまぎれない事実だ。

警部はしばらく死体を見つめていたが、それがふたたび動きだすような気配はなかった。死体の苦悶に歪んだ唇は、窓から斜めにさしこむ午後の光を受けて、日光浴中の両棲類のように静止したままだった。警部は心のかたきで苦笑した。それら、死体は死体じゃないか。さっきのおれの見まちがいでないとすれば、きつと死後硬直にちがいない。そうだ、死後硬直だったんだ。筋肉の

硬直は、まず頬や顎のあたりからはじまるといふじゃないか。警部はこの考えにすがりついてひと安心すると、女のはうへ向きなおった。

「奥さん、凶器も見つかつたようだし、ちょっと署まで来てもらいましょ。いまからあなたに認められている諸権利を言うから、よく聞いて……」

お定まりのミランダ条項を読みあげようとした警部の声が宙に消えた。女がこちらの言うことを少しも聞いていないことに気づいたのだ。彼女の視線は、警部をとおり越して彼の背後に焦点を結んでいた。大きく見ひらかれた腫に驚愕の色が浮かび、唇はアルファベット・クッキーのOの字をつつこまれたような態である。警部の心臓が収縮し、腰のあたりから嫌な感触が這い昇ってきた。彼がまだ半ズボンをはいていたころ、墓地を通りすぎるときにいつも感じていた、あのとくべつな感触が。

警部の内部に甦った童心が、怯えきつた警告を発していた。――後ろを振り向くな！ 振り向かなければ、おまえが危害を受けることはない……。

しかし、警部の首は、まるでゼンマイ仕掛けの人形のように、じりじりと回りはじめた。床に横たわっているものが視界の端にはいつてくる。

死体は上半身を起こしていった。

寢坊をした男が目覚まし時計に促されてあわてて起き直ったような恰好で、死者はこちらを見返していた。その顔には、まさに寝起きの戸惑いの表情——自分がおかれているのが夢の世界か現実の世界かわからない——が浮かんでいる。しかし、彼の顔には、そんな見なれた表情とはかけはなれた、おぞましい傷痕が同居していた。斧の一撃によってできた額の傷口。それは、窓からさしこむ光を受けて、まるで溶岩を噴出したまま活動を停止した火口然とした、微妙で、美しいともいえるような陰影を見せていた。その傷痕がはっきりと物語っていた。男がさまよっていたのが甘美な夢の世界などではなく、はかり知れない冥府の闇だったことを。

警部は、恐怖と驚愕に両腕を抱えあげられた死刑囚のように、その場に立ちつくしたまますくみあがっていた。死んだ男の妻も戸口の部長刑事も凍りついたように動かない。それにひきかえ死者のほうは、ぎごちない動作でゆっくりと立ちあがりはじめていた。動きを止めた生者と動き出した死者。奇妙なことに、その部屋の中だけでは、生者と死者が逆転しているようだった。

死者は生者たちのほうに向き直ると、歪んだ唇を歪んだままの恰好で開き、喉の奥からは搾り出したような声が漏れてきた。

「お、おれは死んだのか……?」

部屋のなかのだれひとりとして、死者の問いに答えられる者はいなかった。警部は、怯えながらも、死者の視線が自分をとおり越して彼の妻のほうに向いていることに気づいた。この夫婦は、そろっておれを無視していると警部はほんやり思った。死者は妻を見すえて驚いたように言った。

「おまえが、殺ったんだな……」

女の神経にはそこまでが限界だった。女は悲鳴のかわりに獣のような喘ぎ声を発すると、後ずさりをはじめた。しかし、そこから先は意想外の展開が待ち受けていた。

死者のほうも女と同じように後ずさりをはじめたのである。警部は死者の濁った目のなかにも、自分たちに劣らぬ恐怖の色が浮かんでいるのを知って驚いた。死者はどりやら自分を殺した相手を恐れているようだった。死者はもうこれ以上さがれない窓際につきあたると、切羽詰まった調子で呻いた。

「い、いやだ。もう、これ以上、殺されたくない」

警部がその言葉をよく理解できないでいるうちに、死者はくるりと振り向くと、頭から窓につっこんだ。ガラスの砕け散る大きな音が部屋にこだまし、事の成り行きをただ見守るしかなかった生者たちは、その音にびくり

と身体を震わせた。

突然のことに、部屋のなかのだれもが口もきけず、ただ立ちつくすだけだった。警部がようやく我にかえたのは、折れた窓枠にぶらさがったガラスの最後の一片が床に落ちて小さな音をたてたのを聞いてからだだった。あわてて窓際まで駆け寄った警部が壊れた窓から外に顔を出す、道路をへだてた向こう側の歩道を一目散に逃げていく死者の後ろ姿が見えた。身体が自由がきかないようになぎくしゃくした足どりだったが、死者の運動能力はかなりのものようだった。しだいに小さくなる死者の後ろ姿を見おくりながら警部は放心したように呟いた。「なんてこった、ほんとに死人が裸足で駆け出しちまった……」

窓の下から、不意にもうひとりの死者が顔をつき出した。

警部は悲鳴をあげると、バネで弾かれたように窓際から跳びのいた。壊れた窓の外に現われた蒼白い皺だらけの顔は、部屋のなかを覗きこみながら嬉しそうに笑った。「まあまあ、今度はまた派手にやったわね、アンヘラの奥さん」

窓の外の顔は死者ではなく近所の穿鑿好きの老婆のものであった。老婆はわけ知り顔でウィンクすると、こう言

った。

「おたくの旦那さん大丈夫？　まるで死人みたいな蒼い顔をして逃げてったけど……」

第一部 死せる生者たち



# 1 ピンクの靈柩車

「……それで、……（聴き取り不能）……し  
たとき、彼がジョン・レノンの耳もとで『死  
がどういふことだか知っている』と囁きつづ  
けたんだ……」

—— ウィンストン・オブギー博士  
〈WMQC局のインタビュアーに答えて〉

ピンク色の旧型ボンティアアック靈柩車が、北をめざし  
て猛スピードで疾駆していた。

ニューイングランドの片田舎。紅葉の季節。黄金に色  
づいたサトウカエデの繁る丘陵では、そろそろシロップ  
造りのための樹液採取が始まり、麓の牧場では、酪農家  
たちが「北・東・王・国・秋・落・葉・祭」に出品  
する見事な白黒ぶちの乳牛や小柄だが精悍なモルガン馬  
の手入れに専心している。

そうした秋らしい色合いの風景を背にピンク色の靈柩  
車はひた走っていた。——この奇妙な取り合わせを、田  
舎に隠遁した間抜けなヒッピーの残党が目撃したとした  
ら、おれはまだ六〇年代の悪いトリップから醒めてない

のかと、白髪混じりの長髪をかきながら嘆いたに違いな  
い。だが、田舎だからこの靈柩車が特に目立った、とい  
うわけでもなかった。やはり麻薬禍の悪夢に出てくるよ  
うなサイケデリック調のいたずら描きが施された地下鉄  
に日ごろ平気で乗っているニューヨーカーたちも、二、  
三日前に五番街を流すピンクの靈柩車を見たときには、  
さすがに度胆を抜かれたのだから。

さきほどから付近の酪農家のビックアップ・トラック  
が何台か、靈柩車と行きちがったり、追いつかれたりし  
ていたが、運転する農夫たちの反応はだいたい同じだっ  
た。彼らはまず驚き、つぎに、こんなことが起こるのも  
みんな民主党が悪いからだと憤慨し（もちろん共和党に  
毒づくやつもいる）、そして最後に、これはひょっとす  
ると、清涼飲料の新製品かファースト・フード・チェー  
ンの新しの宣伝にちがいないと、実にアメリカ人らしい  
結論をくだしていたのだ。

農夫たちが宣伝かもしれないと思う理由は、靈柩車の  
ボディになにやら灰色の文字が書かれていたからだ。だ  
が、靈柩車がもうすこしスピードを落として、そこに  
なにが書かれているのか彼らに読めたら、さっきの結論  
はビックアップ・トラックの荷台から転げ落ちて、かわ  
りに乾し草みたいにもやもやした当惑が彼らの頭を占め